魔界の扉を叩くとき

KINU KAZU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界の扉を叩くとき

【Ｎコード】
Ｎ９５２０Ｗ

【作者名】
ＫＩＮＵ　ＫＡＺＵ

【あらすじ】
蒼空は魔界の扉を叩く――――。その時、物語は動き出す。

キャッチフレーズ（？）的なのはこんなのです。主人公は武術の心得が少しだけある、どこにでもいる普通の高校生です。しかし、蒼空は封印を解いてしまう。そこには勇者と魔王が封印されていた。蒼空は魔王を倒すために勇者と、魔界へ――――。
これは僕の『魔界大戦』の改変ｖｅｒ．です。より良くしようと書

きました。その分、話は全く違ってきます。なので魔界大戦を読む必要はありません。一部設定を残し、話を進めます。魔界大戦を読んでくださっている方、良ければ見てください。キャラも増えます。魔界大戦を良くしようとした作品ですが作者の自己満足に終わる可能性があります。そうなるのは嫌なので、色々アドバイスください。辛口コメントでも大歓迎です。

第一話　夢（前書き）

ＫＩＮＵ　ＫＡＺＵと申します。

まずこの作品についての話をしたいと思います。
この話は僕の『魔界大戦』の改変ｖｅｒ．となります。
設定を一部流用。そして別の話にしていきます。
全く別とはなりませんがいろいろ変えます。
『魔界大戦』は読まなくても問題ありません。
『魔界大戦』を読んでくださっている方でも楽しんでいただける作品にしたいと思います。
『魔界大戦』の改変ｖｅｒ．ですが、話の進め方とかは全く別だし、キャラ増えているので、『魔界大戦』はそれはそれで完結させます。

この作品は『魔界大戦』をよりよくしたいと思う作者の気持ちから始めました。
こうした方がいいかも……。ここをこうすればよかった。そう思う事が多々あったので。
しかし、別によくなっていなくて、作者の自己満足になっている場合は言って頂くかスルーしてください。
こうした方がいいというのがあればお願いします。

では、お願いします。

第一話　夢

「もう、これしかない、俺ごと封印しろ？」
金髪で顔もかなりいい、戦闘服に身を包んだ男が少し後ろを振り返りながら叫ぶ。
だがそれも一瞬のことで、すぐに前の黒い服を身を包む男に向き直り、剣を振るう。
黒い服に身を包んだ男も応戦し、剣と剣がぶつかり、火花を散らし、音を響かせる。
すごい……。そう声を上げるしかない。
黒い服の方の剣はかなり長く２ｍはあるだろう。そして剣はどこか禍々しい。
その剣を全く剣に振られることなく扱い、攻撃をしている。
金髪のイケメンの剣はどこか神秘的で西洋風の剣だった。長い剣は小回りが利きにくい。その利点をうまく利用して色々な角度から攻撃を繰り出していた。
武術を、剣術をやっている蒼空。しかし、そんなことはまず無理だろう。そう思わせる次元の戦いだった。
剣の応酬が続く中、
「早くしろ？　この期を逃すと……世界は終わる？」
金髪の男が叫ぶ。すると黒い服に身を包んだ男が焦ったように剣を振り下ろし、叫ぶ。
「我を封印などできるはずがないだろう」
「なら、何を焦る？　真地、やるんだ。世界の平和を勝ち取り、消える。それは本望だ。やれ？」
そう金髪の男が叫ぶと、後ろに居た戦闘服を纏ったもう一人の男が、顔の造形もかなりいいその顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら、
「分かった」
それだけ言うと、一度、空を仰ぎ、何か唱えるように言う。

すると、ついさっきまでは良く見えなかったが、金髪の男と、黒い服を着た男の下の、魔方陣と思しきものが光り輝き、二人の男を包んでいく。
金髪の男はほっとしたような、そんな顔をし、黒い服に身を包んだ男は焦ったようなそんな顔になった。
「……これで、最後だ。■■、君のことは忘れない。世界の平和のために戦った、君のことを？」
名前のところはよく聞き取れなかったが、涙を浮かべた男が言い、何かを投げ入れた。その言葉と行動を見た、金髪の男は優しげな顔で頷き、
「ありがとう。……やってくれ」
「ああ。……『天から降り注ぐ光よ。彼らを包み、永遠の眠りを与えよ』」
そう唱えると、より一層、光が強くなる。
目も眩むほどの光が世界を包む。すると悲痛な、いや恨みがこもったドスの利いた声が響き渡る。
「我はこれで終わらぬ。必ず、必ず戻り、復讐を、世界を！　……
……手に入れる？」
その声が響き渡った後、光は薄らいでいく。そして光が完全に消え去り、視界が良くなった。
涙を流す男の手には日本刀のようなものが握られている。
男が見る先には先ほどまで戦っていた二人の姿はなく、一冊の本が転がっていた。

？　？　？

「ふぁ～あ」
蒼空は欠伸をしながら目をこすった。
そして近くにある時計に目を向ける。時計が示す時間は５：００。
高校二年生が夏休み初日に起きるには少し早い時間だった。

しかし、蒼空にとっては普通だった。
なぜなら蒼空は武術の心得があるから。こういうのは怠けるとすぐにダメになる。
だから蒼空は早朝ランニングを日課にしているのだ。
蒼空はベッドから降り、ジャージに着替える。
髪を整え、顔を洗い、まだ寝ているであろう家族を起こさないように静かに外へ出る。
そして日課である早朝ランニングへと出かけた。
「ふっ、ふっ、ふっ」
軽く息を弾ませ走る。なぜか今日は体が重い。
「なんか、嫌な予感しかしない……」
蒼空は呟く。こういう時の蒼空の勘はよく当たる。
多少気が重いものの蒼空はランニングを続けた。

いつも通りの距離を走り終え、家の前に蒼空は着いた。
その時間は６：００丁度。
一時間近く走っていたことになる。
しかし蒼空は肩で息をしているものの、大して疲れた様子もない。
蒼空は玄関の扉を開け、
「ただいまー」
そう言い、家へ入る。
この家に住むのは自分を含めて四人。
父と母が起きる時間はだいたい６：３０。
同じ学校に通うためにこの家に居候として来た従妹だけは丁度蒼空が起きてから少しして起きるようだ。
「おかえりー」
そう声がかかる。先も言った通り、この家に住む者の起きる時間は６：３０。
つまりこの声は従妹のものだ。

従妹は蒼空の前まで来ると、
「今日もお疲れ様、お兄ちゃん」
そう言いタオルを渡してくる。
「ああ、ありがとう」
渡されたタオルで汗をぬぐう。
そして従妹と一緒にいつも通り他愛もない話をしながらリビングへと向かう。
そこにはお茶が用意されていて、
「水分補給しなよ」
「ん」
蒼空はそれだけ言うとコップを受け取りお茶を飲む。
いつもながら気が利くな。
「いつもありがとう。澪」
笑顔で言うと澪は少し頬を赤く染めた。
「どういたしまして」
澪は少しほほ笑む。
何故、澪は従妹なのに蒼空の事をお兄ちゃんと呼んでいるのか、最初からそう呼んでいたため気にしたことはほとんどなかったが、一度蒼空は理由を聞くことがあった。
そうすると澪は『気にしたらダメだよ。お兄ちゃん』と笑っていた。
その姿は何故か優越感を漂わせていた。いったい、何にそう感じているのかは分からないが。
「お兄ちゃん、シャワー行く？」
「え、ああ。そうだな」
蒼空はタオルを置き、風呂へと向かった。
蒼空がシャワーを浴びてリビングへ戻ると、リビングにはみんな揃っていた。
「おはよう」

「おはよう、蒼空」
そう端的に会話が済まされる。
別に家族仲が悪い訳でもない、どちらかと言えばいい方だろう。
だけど会話はそこまですることもないし端的だ。
「ああ、蒼空。爺さんがお前に修行に来るように言ってたぞ。夏休みの間、行ってきなさい」
「えぇ！？　貴重な休みが……」
「お兄ちゃんが行くなら私も行く」
「澪はいいんじゃないか？　爺さんが言ってたのは蒼空だけで澪は言ってなかったし」
「でも、私も一応おじいちゃんの弟子だし、悪い虫がお兄ちゃん付いたらダメだし……」
「なんか言った？」
「何も言ってないよ、お兄ちゃん」
澪は笑顔でそう返す。
「はぁ。変な予感はこれか……」
ガックリ肩を落として蒼空は言った。
何はともあれ夏休みは色々と疲れそうだ。

第一話　夢（後書き）

もっとこうした方がいい。読みにくいなどあれば言ってください。
辛口コメントも全然ＯＫです。

たくさんの感想、お待ちしております。
気に入って頂ければ、続きが気になるなどあればお気に入り登録お願いします。

今日は９月２５日。作者の誕生日です。
言わってくださると嬉しいですｗｗ

では。

第二話　雪景

いつからだっただろう？　俺が武術を始めたのは。俺が武術をやっている理由。

それは「いつか必要になる」そう、爺さんに言われ、やった。ただそれだけ。「強くなりたいから」そんな事はない。強くなって、どうする。という事だ。「誰かを守りたい」そんな事もない。この国にはそんな切羽詰まったようなこともないから。

だけど、蒼空は思った。

何か――――。何かが起こる。何が起こるかは知らない。しかし、それが自分にとって意味あることになる。そう蒼空は、直感した。

「お兄ちゃん。次の駅で降りるよ」

一つしか年齢の違う従妹。澪が空の顔を覗き込むようにしていった。

「え、ああ……」

「もう、ボーっとして」

「そう？」

「そう」

「……そうか」

蒼空は、外の景色を眺める。

ボーっとしていたのは本当のようだ。かなり山深い所まで来ている。

電車に乗る客も端っこの方に座っているおばあさんくらいだ。

「ボーっとしてるとおじいちゃんにやられちゃうよ？」

「ははっ。そうだな。爺さんは容赦ないから……」

「だね。……うーんと、お兄ちゃんってお爺ちゃんに誘われて修行、始めたんだったよね」

「えっ？　ああ、そうだけど……」

「けど、なんで？」
「なにが？」
「お兄ちゃんがまだ修行とかを続ける理由。もう十分強いのに。お爺ちゃんくらいしかお兄ちゃんに勝てないくらいに」
「……」
蒼空は黙る。
この従妹には、心を読む才能があるのか。そう思う。
蒼空がまだ、武術をやっているのは、せっかく努力して手に入れた力が無くなるのは嫌だ。もう習慣になったという理由で続けている。先も語った通り、大した理由はない。
だから、この夏休みの間。爺さんに付き合って、それからやめようとそう、蒼空は考えていた。
何か――――。そう、何かあった場合は別だが。でも、何か。そんなものは勝手に自分が思っただけで、何か特別、変なことや凄い事が起きる訳でもない。そう、それが普通。それが世界の理。
だから、蒼空はテキトーに、それでいて適当に。
「お前を護るため」
そうサラッと言うと、澪は顔を真っ赤にして慌てふためいている。真っ赤になってあたりをキョロキョロして、「はぅ～～～～」とか、いろいろ言った後、俯く。
こういう澪はかわいい。いや、澪は普段から美人だし、かわいい。顔はかなり整っているし、なにより性格がいい。それに家庭的だ。学校でもかなりの男子が澪を狙っているのも知っている。
そんな澪が、上目づかいで。
「本当？」
そう、聞いてくる。一般的な十七歳男子ならここで倒れているだろう。それぐらい、破壊力があった。いつも一緒にいる蒼空でもそう思うぐらいだから、それは相当なものだった。しかし、蒼空は一緒にいるので少しは耐性もついている。蒼空はニッコリ笑って。
「嘘」

と、言ってみる。すると見る見るうちに落ち込んだような顔になっていく。その眼には涙まで浮かんでいた。
「冗談。お前に何かあったら守りたい。いや、守ってやる」
すると打って変ったように笑顔になる。
蒼空が言った事。それは本心だ。澪を守りたい。しかし、これは武術をやっている理由にならない。いや、ここまでと、言った方が正しいか。この国で起きる、澪に降りかかりそうな事件。それはあっても強姦魔や通り魔と言った物だろう。そんな者に対する対処。それができるような実力はとうの昔についている。今ではもう、並大抵のものでは蒼空を倒せないくらいに強くなっていた。理由もなく。おそらく最初の時は澪や家族を守りたいと思う心はあったのだろうが、今は違う。守って見せるが、それは簡単で、目標に掲げるまでもないもの。と、いう風に蒼空の中での認識はなっていた。
「まぁお前は自分で守れるんだろうけど……」
そう呟く。澪は澪で武術をやっている。今はもう鍛えたりはしていない。だが普通に一般人より強い。
「でも、好きな男の子に守ってやるって言われると女の子は嬉しいものなんだよ……？」
「…？　なんか言ったか？」
「な…なんでもないよ」
少し拗ねたような、それでいてどこか恥ずかしそうな感じで澪は呟いた。

？　？　？

「蒼空、この刀を取れ」
蒼空は爺さんに唐突に言われる。
「はい？」
蒼空は全く意味を理解できないでいた。
蒼空と澪は爺さんの家へ、天国への階段とまで称される階段を登

り切り、たどり着いた。山の頂上に位置するこの家。だからここは心なし、酸素が薄い。だからかなり蒼空は疲れているのだが、すぐに爺さんに来るように言われ、道場に座っている。
そして言われた意味の分からない言葉。……言葉の意味は分かるがなぜそれをしないといけないのか分からない蒼空は頭の上にはてなマークを浮かべ聞く。
「この刀を取るだけじゃ。簡単じゃろ？」
爺さんはそう答え、刀を前に突き出してくる。
それを蒼空はまじまじと眺める。蒼空の斜め後ろでは澪が興味深そうにのぞきこんでいた。
「これは……」
蒼空は呟く。そして蒼空は思考する。
これは夢の……。夢の男が持っていた剣にそっくりだ。これがなぜここに？　それにあれはただの夢のはずでは……。そう蒼空は考える。
しかし……考えても無駄か。そう思った蒼空は剣を受け取る。
瞬間――――。
蒼空は手に刀が吸い付くような、元から蒼空が振っていた刀だと、思わせるぐらいの感覚に陥る。
そして、室温が下がったような。そんな感じに襲われる。それも一瞬のことで蒼空は爺さんを見る。
「これは？」
「その刀の名は『雪景（ゆきげしき）』。この家に伝わる、ご先祖様が使っていた刀」
「『雪景』……」
蒼空はそう呟いた。その名前を言った瞬間、蒼白い光が刀から発せられる。
すると蒼空の意識は一気に持っていかれた。

そこは蒼い。
蒼空は水面の様な蒼一色で満たされたところに立っており、見上げた先の空は蒼い。
すべてが蒼一色で埋め尽くされている。そこには蒼空しかたっていない。蒼空しかいない。辺りを見回しても、叫んでみても誰もいない。
「ここは……？」
そう呟いてみる。蒼空は答えが返ってくるのを期待して呟く。
すると声が響いた。
『貴様は？』
空から空中から声が聞こえた。蒼空は体を低く、低くしていく。何が起こっても対処できるように。蒼空は訓練されたようにそうする。
そしてそれから声を出す。
「俺の名前は氷堂蒼空。お前は誰だ？　どこにいる？」
「私はそこにいる」
「どこだ！」
蒼空はあたりを見渡す。見渡しても誰もいない。風景は変わっていなかった。それでも、声の主はそこにいると言った。
「貴様の目の前だ。集中しろ。我を認識しろ。我はそこにいる」
蒼空は言われた通り、集中する。そして前を睨む。
そこには一人の青年が立っていた。
青い髪。蒼い目。碧い翼。それらを青年は持っていた。
その姿はとても堂々としていて、綺麗で、美しく、格好良かった。
「あなたは？」
その青年の神々しさに当てられ、蒼空は敬語になる。
「我は――――。」
「え？」
「貴様は氷堂蒼空。真地の子孫か」
「真地？」

「貴様は自分の先祖も知らんのか。……ふむ、まぁいい」
「それよりあなたの名は」
「無駄だ。とりあえず名乗ったがお前はまだ我の名を認識できぬ。いや、貴様は知っているが我の前では言えぬ」
何を言っているのかさっぱりだった。
だからとりあえず、黙る。そうするとその青年は喋りだした。
「蒼空。貴様は力を欲するか？」
「力？」
「そう力だ」
「別に必要ないかな」
すると青年は驚いたような顔になる。
「珍しいな」
「珍しい？」
「ああ。力をいらないという奴も、ここに来るやつも。まぁいろいろ」
「ここに来るのは珍しいか知らないけど、力を欲しない奴はたくさんいると思いますけど？」
「そうか？　人は皆力を欲する。権力を手に入れるため、金を手に入れるため、女を手に入れるため、いろんな理由で人間やその他種族は力を求める」
「そうかもな」
「貴様はなぜ力を求めぬ？」
「強いて言うなら理由がないから……かな」
「理由が……」
「そう理由がない。理由は今、探してる」
「そうか……。なら理由が見つかればまたここに来るといい。力を与えてやろう。貴様が……」
最後の部分は聞き取れなかった。目が回るような感覚に陥ったからだ。
そして蒼空はまた意識を失った。

第二話　雪景（後書き）

何かあればお願いします。

お気に入り登録感想等待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9520w/

魔界の扉を叩くとき

2011年9月26日20時34分発行